

卒業論文を書く人々のために

方言研究にはどんなテーマがあるか

はじめに

方言研究のテーマは、どこにもある。何でもテーマになる。たとえ人がやつたことを自分の態度でとりあげたら、それがみんな、自分のテーマになる。それがみんな、自分のテーマでテーマを求めなければならない。何でもか、みな自分の好テーマに見えてくるのでなくてはならない。方言を勉強することにしたら、何を見てもそれがみな方言に関係のあることと思えてくるようであるように！

方言の論文、方言を研究して論文を作ろうとする時、はじめの心がまえとして欲しいことがある。方言研究を単純に特殊なものとしてでは考えようというにしない。特殊なことをやろうと思つて方言にしたりかかるとは、まちがひである。国語研究の正常な姿で、方言という、国語の事実・事象・事象のV研究にしたがうべきである。方言研究に奇を求めめる態度はすてなくてはならない。どの道の研究でも、好事物であつたり珍奇を追つたりすると、研究は下品になる。方言研究を、国語研究として、品格の高いものにしたい。

参考書である。福武直氏「社会調査」岩波全書は、方言調査法の見参考書である。参考書は、方言調査法、多岐就、今後の方言研究を、国語研究として正統なものにしていただきたい。研究の二方向、方言研究のテーマを求めるとなつた時、まず、二つの行き道が考えられる。一つは、単一の方言、たとえば自己の郷里の方言社会の方言生活のままとまり、これを一完結体として見て、もつぱらその全体把握にしたがふとおうとするものである。これを、方言、体系的記述の方向とする。他の一つは、諸方言(つまり、方言という体系存在の二つ以上)を横に見くらべていく研究方向である。これを比較研究の方向とする。体系的記述、単一方言を対象とする研究では、今日の如く、研究の手づつけれない。方言の、なんでもか、いたる所に、好箇の研究対象がある。山間僻地にももろろんどこ、都会の中にも、それらの方言存在を、一個の言語体系として見て、丹念に調査・研究する。とは、すこぶる有意義である。言語学の本格的な研究がここでできるのだと考へて、言語学に親みな方が、調査研究にしたがうていただきたい。

体系的記述の中で、これを限つて、文法現象だけを問題にしてもよい。音韻関係の現象についてもよい。語調のいろいろや、語彙のことも研究してもよい。その語調についてのことでも、造語法だけをとり立ててテーマにしてもよい。文法のことでも、方言副詞を精密にきつてみるのでもよい。

音のことも、異常と思われる発音を特にとり立てて問題にするのもよい。調査項目、研究対象を小さく限つて、それを徹底的に追求するとは、研究して「全体に対する部分」という見かたで考えかたは、厳格に守つていかななくてはならない。でなしに、個の研究が、大きく生きない。見かた考えかたを又発展的であるならば、小問題に徹底するほどよいとも言ふ。今日は、大さうばな大きい報告より、くつきつとした小報告が重んじられてよい時だと思つた。

比較研究 方言と方言との比較では、一方言個体に属するある事象(たとえば「めだか」の方言名)と、他の諸方言個体にそれぞれに属する同種の方言事象とを比較する。ここで、いわゆる言語地理学の研究がうまれる。この研究には、だれしも、すぐに興味をおぼえやすいようである。自己周辺の「キートン」をとり上げたら、これが近隣の他の諸方言ではどうなつて、これを順次たずねていけばよい。調査は行脚による。あるいは「全国方言辞典」などをたよりに見当をつけて、諸方言に通信調査をこころみてもよからう。この時は、自分が見ず知らずの人から突然に通信質問を受けたら、どうように考へて、的確親切な回答が得られるように、注意しなくてはならない。

この研究を組織的に取扱ふことが、この研究から集めた事象を比較すると、第一に「語史的」研究が成り立つ。このような研究は、今までの言語地理学関係の論著の多くが、その実例を示しているから、参考にするによい。わたつて考へたこと、参考がある。いわゆる言語地理学的方法は、旧来にはのびのびと道を守つてきた。これをもちと拡充することはできないか。事象の比較研究から、方言と方言とを比較する研究も、おこなうことができるはずである。

藤原与一